

都道府県別賞一等

私と家族の生命線

高知県 高知中学校 二学年

本田 日菜子

三年前の秋、郵便ポストを開けると、母宛ての「生命保険重要書類在中」と赤い字で書かれた郵便物が目に留まった。その文字を見た瞬間、胸が苦しくなった。母の身体に何かあったのだろうか。最悪の事態を考えると真実を知るのが怖かった。覚悟を決め、仕事から帰ってきた母に手紙の事を恐る恐るたずねた。すると母は驚いた様子だったが、

「これはお母さんが入っているガン保険の書類よ。生命保険と書いてあるからびつくりしたよね。五年前に医療センターに入院したのを覚えてる？実をいうとあの時、ガンが見つかって、そのガンを摘出する手術を受けたのよ。」

あまりにも突然の母のガンの告白。頭の中が真っ白になった。『ガンってどういう事？身体もう大丈夫なの？』私は動揺を隠せなかった。そんな私を見て母は、

「お母さんが入っている生命保険は最強なのよ。入院費や手術の費用はもちろん、術後の通院、生活費の保障もしてくれるの。病院でガンと告知された時、正直、目の前が真っ暗になったの。死んじゃうのかもってすごく不安だったし、何よりも残される三人の子供はどうなるのだろうか。そんな時、この生命保険が助けてくれたのよ。」

母はガンであるという事実を知り、死の恐怖のほうがきつと強かったと思うが、自分の身体の事より、万が一の事があればあとに残される私達の心配をしていた。それは母らしいと思った。母はどんな時も私達の事を優先してくれる。嬉しい事だが、私は逆に不安になる。私達の事を優先し過ぎで、無理をしているのではないのかと。私は母に保険の話聞くまで、全く保険の事は知らなかった。

保険について調べてみると、様々な種類があり、それぞれのライフスタイルに応じた保険を選択できる。母の加入している保険はガン保険であり、ガンと診断されたら手術にかかる費用や入院費、術後働けない間、生活費を保障してくれる保険だった。

保険の掛金は若い時に加入すると安い。それは病気になるリスクが低いからであり、母も仕事を始めた二十歳から加入していた。当時、職場の上司に保険には入っておいたほうがいいと勧められたからと言う。母は、正直、保険って、必要なかと疑問に思っていた時、その上司が突然ガンで亡くなったとい

第61回中学生作文コンクール

う。残された家族は上司が残してくれた生命保険のおかげで生活し、子供を大学まで行かせる事ができたらしい。保険というのは、病気になった人だけではなく、残された家族も救うすばらしいものだという事がわかった。

病気になるとまず、病気は治るのか不安に感じる。その次に治療費や生活費の事が頭に浮かぶ。私の家は母子家庭で、母一人で家計をやりくりして、懸命に三人を育ててくれている。もし母が生命保険に入っていなかったら、治療をあきらめていたかもしれない。治療を受けるか悩んでいた母の背中を押してくれたのは生命保険である。

今年の春、上の兄が大学に入学した。兄は成人年齢が十八歳に引き下げられたので、自分で保険に加入した。兄は生まれつき腎臓に疾患があり、入れる保険の種類が少なく、掛金も高いという。それでも保険に入るのは、兄が母の病気を通して生命保険の大切さを誰よりも知っているからである。病気にならないのが一番であるが、人生何がおこるかわからない。そのためにも万が一の事を考えて備えが必要である。

母が手術をして、八年の月日が経つ。現在も抗ガン剤治療を受けながら、仕事に子育てにと忙しく働いている。時折、薬の副作用で苦しそうにしている姿を見ると不安だが、支えてくれる周りの人たちの協力と、保険の手厚い保障のおかげで幸せな日々が続いている。そんな毎日に感謝している。この幸せな日々がいつまでも続いて欲しい。